えっ、
転移失敗!?
……成功?
小説 ほーち
イラスト saraki
試し読み版

CONTENTS 目次

プロローグ 5
1　見舞金の行方 33
2　謝罪と賠償 43
3　スキルの確認 66
4　言伝（ことづて） 74
5　今後の方針 79
6　【帰還＋】の真価……あるいは設定ミス 85
7　【鑑定＋】はチートの代表格 95
8　１等くじ換金　そして…… 103
9　装備の調達 131
10　戦闘訓練、というか実戦 139
11　南の町へ 150
12　南の町で 167
13　安心安全な社会のために 175
14　チェンジか否か 185
15　まずはシャワーから 190
16　サービスサービス 195
17　寝起きはプライベートです 207
18　アフターじゃありません 214
19　新しい住まい 225
20　そして異世界へ 261
番外編「リナとの再会」 277

What? Failure to transition!? ……success?

プロローグ

1　トラック事故

年明け最初の操業日。

カレンダー上では特に祝日を挟んだわけでもないのに、いつもより長い正月休みを経たにもかかわらず、この日の業務は半日で終わった。

工場の休憩室では、缶コーヒーとタバコを片手に作業員の男たちが雑談している。

近年珍しく喫煙を許可されている休憩所なので、室内はタバコの煙が充満していた。

「あー、今日も半日で終わったなぁ……」

と、さみしげに呟くのは、35歳独身の工場作業員、藤堂陽一。

ほかに数名の作業員がおり、みな例外なくタバコを咥えたり指に挟んだりしているが、陽一の手にタバコはない。

そもそも彼にはタバコを吸うという習慣がない。

にもかかわらずここにいる理由としては、第一にタバコの煙が気にならないということ、第二に終業後のダラダラとした空気が嫌いじゃないということが挙げられる。

「俺、そろそろカードの支払いヤバいかもしんないですわ」

陽一は先輩の野口に、半ば独り言に近い愚痴を吐いた。

「だったら、とりあえず国金に相談してみなよ」

「コッキン？」

「そ、国金。俺ら一応個人事業主扱いなわけだし？」

「国金ってなんです？」

「俺も建築屋の知り合いからチラッと聞いただけだからよく知らんのだけど、国の金貸しみたいな」

「借りれるんすか？　俺もうキャッシング枠いっぱいいっぱいなんですけど」

「いま借り手がいなくて困ってるらしいぜ？　年利2

パーとかで審査もユルユルなんだと」
「マジですか⁉　ちょっと調べてみますわ」
そうやってダラダラと雑談を続けている休憩室の戸が開かれ、正社員の田村（たむら）が顔を覗かせた。
「おおーい、工場閉めるから悪いけど帰ってくれるかー？」
『ういーっす』
各々タバコの火を消したり、缶コーヒーを飲み干したりしながら立ち上がる。
陽一も飲み干した空のコーヒー缶をゴミ箱に入れ、休憩室をあとにした。

○●○●

陽一が勤める工場は、数年前に完全歩合制を採り入れた。
数少ない正社員は無論月給制だが、非正規作業員は完全歩合制となった。
ただし、作業員の肩書はアルバイトでも派遣でもなく、個人事業主。
やっていることはバイトと変わらないのだが、一応個人事業主に業務を委託している、という体裁を整えている。
なので、保険や年金は完全自己負担。
最低賃金などというものは適用されず、仕事がなければ今日のように早めに終業となり、そのぶん報酬も減る。
とはいえブラックかと問われれば微妙なところだ。
繁忙期になれば時間あたりの業務量は大幅に増え、3～4時間の残業はあたりまえとなり、完全歩合制であるがゆえにそのぶんの報酬もきっちり上乗せされる。
多いときには月の報酬が40万円を超えたこともあった。
そのぶん、閑散期には15万円を切ることもある。
平均すれば25万円程度になるだろうか。
なので、決して劣悪な労働環境とは言いきれないの

だった。
ただ、この収入の波というのが恐ろしい部分でもある。
きちんと自己管理ができる人間、もしくは、先輩の野口のようにきっちりと金銭管理をしてくれる妻がいるような者であれば問題ない。
報酬が多いときはしっかり貯え、少ない月に貯えを切り崩す。
そういうことができればまったく問題ないのだが、陽一は残念ながら自己管理が甘いタイプの人間だった。
報酬が多いとどうしても無駄遣いしてしまい、生活レベルを上げてしまう。
そして一度上がった生活レベルを下げるのは困難で、報酬の少ない月もうまく節制ができず、赤字になってしまうことがしばしばあった。
その結果、クレジットカード利用分の一部をリボ払いにしたり、〝給料日までのつなぎ〟と称してキャッシングに手を出したり、というのを繰り返し、いまでは結構な額の借金ができてしまっているのだった。
一応今月の支払いぶんくらいはなんとかなりそうだが、来月はどこかから融通しないと各種支払いが滞る可能性があり、じつは内心恐々としている。
「うぅ、寒……。国金……国金かぁ」
工場からの帰り道、陽一はスマートフォンで『国金』とやらについて調べていた。
歩きスマホにならないよう、信号待ちなど、足が止まったときだけ画面を見るようにしている。
そのあたりの倫理観はそれなりに持っている陽一であった。
「政府金融……これか」
それらしいサイトを発見し、情報を精査していく。
陽一が求めているのは、安い金利での借り換えであった。
しかし、この国金とやらは、借り換えでの利用はできないと明記されているのを発見した。
公式サイト以外に、一般人が利用方法を解説したサ

イトを覗いてみたが、結局のところ設備投資や新規雇用等に必要な経費のみを借りられるサービスのようで、しっかりとした事業計画がなければ審査は通らないということが判明し、陽一は大きく肩を落とした。

（野口さんめ……あいかわらずテキトーな……）

先輩の野口という男、しっかりものの妻がいなければおそらくは陽一同様、いや、それ以上に生活に困っていたに違いない。

ちょうど信号が変わったのでスマートフォンをショルダーバッグに入れ、顔を上げた。

すると、信号を無視しそうな勢いで横断歩道へと突っ込んでくるトラックの姿が見えた。

「お……マジか⁉」

あのままスマートフォンを見ながら安全確認をせずに歩きだしていれば、あるいはトラックと衝突していたかもしれないが、幸い早い段階で気付いたのでトラックが通り過ぎるのを待つ。

ほかの歩行者もほとんどが気付いていたので、あわてて立ち止まる姿がちらほらと見えた。

……が、道路の向こう側から、ひとりの子供が安全確認を怠り、信号が変わったからと半ば走るように横断歩道を横切ろうとするのが見えた。

おそらくは子供の名前であろう名詞を叫ぶ母親と思しき女性の声。

いま飛び込めばこの子を助けることができるだろうか？

一瞬迷っていると、その子供のうしろから飛び出す人影が見えた。

どうやら若い男のようで、その男はすぐ子供に追いつき、子供の腰を抱くように腕を回したあと、身体を反転させて元いたほうへ子供を投げ飛ばした。

そして、その反動で男が半ばよろけつつも、結構な勢いを持ったまま陽一のほうへ飛び込んでくる。

「よし！　来い‼」

陽一の近くに信号待ちの歩行者はおらず、また、そこはトラックの進路からも外れていた。

うまく受け止めることができれば男も怪我をせずに済むだろう。
一応工場でそれなりに肉体を使う作業を行なっているので、多少なりとも力に自信はある。
陽一は腰を落とし、勢いよく飛び込んできた男をガシッと受け止めた。
「どもッス！」
受け止められた男が、陽一を見て笑顔を見せる。
なかなかの好青年のようだった。
安堵しつつ視線を前に向けると、なぜか吸い込まれるように自分たちのほうへと向かってくるトラックが視界の大半を占めていた。
「うわああああぁぁぁ……あれ？」
確かにいま、トラックが目前に迫っていたはずだ。
そのあと、おそらくは衝突するのだろうと思い、顔を伏せ身体をこわばらせていたが、一向に衝撃がこなかった。
恐る恐る顔を上げ、周りを見回してみたが、なにもなかった。
そう、なにもない。
なにもない、真っ白な空間。
「これって、まさか……」
嫌な予感を覚えつつもあたりを見回すと、ひとりの男性が立っていた。
どうやら先ほど自分が受け止めた男のようだ。
いつの間に陽一から離れたのだろうか。
「あの」
陽一が声をかけると、その男性は弾かれるように振り返った。
「……あ、さっきはどうも」
どうやら向こうも陽一の正体に気付いたようだ。
「あの、オレらさっきトラックに……」
「……ですよねぇ？」
「もしかしてッスけど、オレら……」
「死んだ……んですかねぇ」

決定的な言葉を口にする。
どう考えても、先ほどまでいた場所ではない。
なにより、このようなにもないただただ白く広い空間が地球上にあるとは思えなかった。
足下を見てみるが、地面らしきものもないのだ。
にもかかわらず、なんとなく立っていられるという不自然さもあった。
「はあぁぁぁ……新年早々ツイてねぇなぁ。来月子供生まれるんスよねぇ、オレ」
「ホントですか⁉　それはおめでとうござ……って言ってられないですねぇ」
「ッスねぇ。まあこないだ生命保険に入ったばっかなんで、ラッキーっちゃあラッキーなんスけど」
「へぇえ、俺なんて県民共済だけですよ」
「いやいや、オレもそうだったんスけどね？　会社の休み時間に来る勧誘のおばちゃんに根負けして入っちゃったんスよぉ……。あ、でもそのことまだ嫁さんに伝えてないんスよねぇ」
「まぁ大丈夫じゃないですか？　保険会社から連絡行くでしょ。外交員が来るってことは旧財閥系のちゃんとしたとこだと思いますし」
「そッスかねぇ。まぁ会社の連中も見てたから、誰か伝えてくれるッスかねぇ」
「そういえば来月生まれるってことですが、男の子ですか、女の子ですか？」
「男なんスよ～」
「名前は決めたんですか？」
「いや～、苦労しましたよぉ。最近流行(はや)りのキラキラネームとかにならないようにいろいろ考えたんスけどね？　最終的には〝シンタ〟ってことで決まりかけてたんスけど、なんか嫁が急に反対し始めたんスよねぇ」
「シンタくん、いい名前だと思いますけどねぇ」
「ッスよねぇ⁉　でもなんかところてんがどうのこうのって……」
「……もしかして〝心〟に〝太い〟でシンタくん？」
「そうッス‼　ぶっとい心でたくましく生きてほしい

って意味で〝心太〟ッス」
「あの……ところてんって知ってます？　食べ物の」
「あのツルッとしたやつッスか？　オレは三杯酢で食べるのが好きッスねぇ」
「俺は黒蜜派ですけど、そのところてんです。そのところてんを漢字で書くと、〝心〟に〝太い〟なんです」
「ま、まじッスかぁあ～！！？」
「マジっす」
「あぁぁ……、それでアイツ、太いじゃなくて大きいにしようって言ってたのかぁ……」
「ま、まぁその辺は奥さんがうまくやってくれるんじゃないですかね？」
「オレの遺言だと思って〝太い〟のほうにしなけりゃいいんッスけど……。あ～、夢枕に立ちてぇッス……」
　雑談が一段落したところで、ふたりの目の前の空間が歪み始めた。
「うぉ!?　なんかグニャって」
　そして、その歪みの中から和服姿の若い女性が現われた。
「すいませーん、お待たせしましたぁ!!　えーっと、トウドウさんですね？」
　彼女は書類を片手に出現し、ふたりのほうを見ていなかった。
「はい」「ッス！」
　その女性はあわてたように顔を上げ、驚いたような表情を浮かべた。
「へ……？」
　白い空間に、女性の間抜けな声が響いた。

2　白い空間にて

おそらくはトラック事故により死亡したふたりの男。そして死後の世界と思しき真っ白な空間に、突然現われた和服姿の女性。

藤色で落ち着いた柄の小袖、肩口で切り揃えたまっすぐな黒髪の一部をアップにし、かんざしを挿しているというその姿から、なんとなく場違いな印象を陽一は受けた。

ではこの白い空間にふさわしい格好というのがどういったものかと問われても答えようはないのだが、さりとて目の前に現われた和服姿の女性の格好というのはどのようなシチュエーションにおいてもどこかずれたような印象を与えるのではないかと、少々失礼なことを陽一は考えていた。

少し太い眉に奥二重の目、高くもなく低くもない鼻、そして少し厚ぼったい唇と小さめの口は、なんというか、絶妙なバランスをもって『平凡』といわしめる容姿であった。

その和服女性は、ふたりの姿を見て、唖然とする。女性の視線がふたりのあいだを何度も行き来していた。

「なんで、ふたり……？」

「あのぉ、オレらって死んじゃったんスかぁ？」

「え？　あ、ああ、はい、ご愁傷さまです」

「カァー!!　やっぱしかぁ……」

先ほどまでは曖昧（あいまい）だったことが、この女性に告げられたことで確信となった。

突然現われた正体不明の女性に告げられたから納得する、というのもおかしな話だが、しかしなぜかふたりはストンと納得できたのだった。

ただ、女性の言葉が気になった。

どうにもその口ぶりから、本来ここにいるのはひと

りであるはずだったのだろうか？
もしそうなら、そして一方が生き返ることができるのであれば、彼を戻してあげてほしい、と陽一は思った。
別段死にたいと思っているわけではない。
しかし、いざ死んでみると、驚くほど未練がなかった。
（うーん、再来月の金策を考えずに済むならこのまま人生ドロップアウトしてもいいかな）
情けない話だが、本音である。
「ええっと、すいません、トウドウヨウイチさん？」
「はい」「ッス！」
そこでふたりはお互い顔を見合わせた。
「おお～、同じ名前なんスねぇ」
「みたいですねぇ」
「ああっと、すいません。東のお堂に太平洋の洋と数字の一」
「あ、オレッス」
（俺じゃなかったか……）
「ちなみにアナタのほうは？」
「藤のお堂に太陽の陽と数字の一です」
「そうですか……。では藤のほうの藤堂さんは少しお待ちを」
そして、和服姿の女性は〝東堂〟と話を始めた。
要約すると、この女性は世界の管理者のひとりで、いうなれば神のような存在だった。
そして、東堂はこのあと異世界に転生する、ということを告げられる。
暇つぶしにネット小説をよく読んでいた陽一には簡単に理解できたが、どうにも東堂はその辺に疎いらしく、さらにこの管理者の女性も説明が下手だった。
結局、陽一がいろいろと補足した結果、ようやく東堂は自分がこれからどうなるか、ということを理解できたのだった。
転生先は剣と魔法のファンタジー世界。
時代背景は中世ヨーロッパに近いものの、魔法文化

があるのでこちらの世界との文明比較は困難であるらしい。
　東堂は、騎士爵家の三男という微妙な身分に生まれるようだが、現在あちらの世界では魔王が不穏な動きを見せており遠からず全面戦争になる可能性が高く、武勲次第では下手な貴族より出世できるとのことだった。
　先述の魔法、そしてスキルといったものが存在する世界で、前世、すなわちいま現在までの記憶と成長補正関連での反則的な特典能力、すなわちチートを持って生まれ変わることができる。
　その気になれば単独で魔王城に乗り込んで魔王を倒せる程度に強くなれる可能性もある、とのことだ。
　主人公街道まっしぐらではないかと、陽一は感心していた。
「つまり、ロープレっぽい世界に行くっつーことッスか？」
「まぁ最近のっていうよりはひと昔前に流行ったような感じだと思うけどね」
　いろいろと説明を補足してるあいだに、ふたりの距離は随分と縮まっていた。
「しょーがないッス。嫁と子供は保険金でなんとかやってけると信じて、オレは新しい人生を満喫するッス!!」
　なんとも切り替えの早いことだ。
「お互い同じ世界に行くんなら、また会えるかもしれないッスね!!」
「いやいや、転生するんだから別人になってるんじゃない？　いざ会ってもわからないと思うよ？」
「そッスねぇ……じゃあ合言葉でも決めとくッスかね？」
「……よし、じゃあ合言葉は心太（ところてん）で」
「おおっと手厳しいッスねぇ！　じゃ、それで」
「あのぉ……」
　ふたりが親しげにやりとりしているところへ、管理者が割り込んできた。

「そろそろいいですかぁ？」
「あ、いいッスよ」
「どうぞどうぞ」
「じゃあ、転生を開始します」
「お先ッス」
随分と軽い挨拶を残し、東堂は消えていった。
「さて……」
管理者が不安げに陽一を見る。
（いや、不安なのはこっちだっつーの！）
「どうしましょう、藤の堂さん？」
東堂と藤堂を区別するための呼び方だろうが、いきなりそう呼ばれて陽一は少し眉をひそめた。
が、別段不快というわけでもないので、特に指摘はしない。
「いやいや、どうしましょうって、俺に選択肢はあるんですか？」
「ええっと、じつはここに来る予定だったのは先ほどの東の堂さんおひとりのはずだったんですよねぇ」
「いや、でも俺も死んだんですよね？」
「えっと……みたいです」
「じゃあどうしようもないじゃないですか」
陽一があきらめたように呟くと、管理者は突然土下座を始めた。
「申し訳ありませんでしたぁ!!」
「いやいや、べつに怒ってませんから！　このまま消滅ってんでもしょうがないと思いますし」
陽一があわててフォローすると、管理者はガバッと身を起こした。
その顔は反省と悔恨の涙に濡れていた。
「そんなことにはなりません!!　私の持てる限りの権限を使ってなんとかしてみせます!!」
「はぁ。じゃあどういう選択肢があるんでしょうか？」
「そうですねぇ」
と、先ほどの涙はなんだったのかと文句を言いたくなるほど素早く、管理者の表情や口調が切り替わる。
どういう原理か、涙のあとすらなくなっていた。

「確認したところ、身体の損傷がほとんどないので修復は可能ですね。なので、そのまま生き返ることもできますよ？」
（うーん……、なんというか、現実世界のワープア生活にはうんざりっちゃあうんざりなんだよなぁ）
「俺も異世界転生できないですかね？」
「あ、そっちのほうがいいですか？」
「えーっと、条件次第では」
すると、いつの間に取り出したのか、管理者は手帳を凝視しながらペラペラとページをめくり始めた。
「そうですねぇ……、転生先として利用できる存在に空きがないので、転生は無理ですが、転移ならなんとか」
「転移……ということは、元の身体のまま異世界に？生き延びれますかね？」
「あ、それなら東の堂さんが転生だったので、いまならひとりぶんの『定番スキルセット』に空きがありますよ！」
「定番スキルセット……その内容は？」
「えーっとですね【鑑定】【無限収納】【言語理解】【帰還】の4つです」
陽一はそれぞれの説明を受けた。

【鑑定】
見たものの情報を確認できる。
かなり詳細に確認が可能なようだ。
情報源はアカシックレコード的ななにか、と言えばご理解いただけるだろうか。

【無限収納】
使用者を中心に半径1メートル以内にあるものを異空間へ出し入れできる。
体積や重量に関しては原則無制限だが、生物の収納はできない。
そして、【無限収納】内は時間の流れが止まっている。
いわゆるアイテムボックスというものだろう。

【言語理解】
あらゆる言語を母国語レベルで理解できる。
読み書きにも対応。
異世界であっても言葉に困らないためのものであろう。

【帰還】
設定したホームポイントへ瞬時に帰還する。
ホームポイントを変更した場合、その翌日から10日間は変更できない。
帰還専用の転移スキルといったところか。

「本当は成長補正やユニークスキルなんかをおつけしたいのですが、いまの私にはこれが精一杯です……」
「いえいえ！　異世界ものでよく見るスキルですけどどれも便利そうですよ！　ありがとうございます!!」
「そう言っていただけると助かります……。では転移を開始しますね」
「はい、お願いします」
管理者が陽一に手をかざす。
陽一の視界が白くぼやけていき、やがて彼は意識を失った。

目を開くと白い天井が見えた。
どうやらベッドに寝かされているらしい。
軽く見回すと、腕からチューブが延びているのが見えた。
その先には点滴用のパウチのようなものがあり、もう少し首を動かすと、心電図を表示する電子機器が視界に入る。
口元には透明なマスク。
軽く首だけを起こし、あたりを見回していると、通りかかった看護師と目が合った。
一瞬驚いたような表情を見せた看護師は、あわてて陽一のほうへ近づいてきた。

「藤堂さん、私の声が聞こえますか？」
声がうまく出そうにないので、軽く頷(うなず)く。
「よかったぁ……。じゃ先生を呼んできますんで、少し待っててくださいね」
そう言い残して看護師は陽一のそばから小走りに去っていった。
状況はよくわからないが、少なくとも中世ヨーロッパ風の剣と魔法のファンタジー世界ではなさそうだ。

3　転移失敗？

陽一はトラックに撥ねられて死んだはずだった。

同時に死んだ東堂とともに正体不明の白い空間に飛ばされ、世界の管理者と称する女性に会った。

そして東堂は異世界へ別人として転生した。

陽一が死んだのは予定外だったらしく、元の身体のまま『定番スキルセット』という便利なスキルを付与され異世界へと転移することとなった。

……はずなのだが、ここはどう見ても現代日本だ。

では、あれは事故で意識を失ったショックで見た夢だったのだろうか？

とにかくそれを確認する必要があった。

「ステータス！」

陽一がそう念じようが口に出そうがなにも起こらない。

一応身体は動くようだが、長時間眠ったあと急に起き上がるのはよくないと以前テレビかなにかで見たことがあった陽一は、寝転がったままシーリングライトや脇の機器等を見て、「鑑定！」「これはなんだ？」と口に出したり、念じたりしてみたが特に反応はなかった。

しばらくすると若い男性医師が陽一の下を訪れ、いろいろと確認された。

まず治療費や検査費はトラック運転手の所属会社がすべて負担してくれるらしく、明日精密検査を行なうとのこと。

事故から半日程度しか経っていないため急性肺血栓塞栓症などの心配はなく、起き上がったり歩いたりはしてもいいが、激しい運動と、病院から出るのは禁止された。

「あの、もうひとりいませんでしたか？」

「ええ。ただそちらの方は残念ながら……」

「そうですか……」

事故現場にもうひとりいたこと、そしてそのもうひ

とりが死んだのは確かであるようだ。
身元を確認したかったが個人情報に関わるので教えてはもらえなかった。
残念な反面、病院側のコンプライアンス意識の高さに少し安心もした。
半日ぐっすり休んだおかげか、点滴などの医療行為のおかげか、体調はすこぶるよかった。
とにかく空腹を覚え、病院食でいまひとつ満足できなかったた陽一は、病院内の売店でサンドイッチと缶コーヒーを購入した。
食事制限についてはなにも言われていなかったので。

翌日、ＭＲＩやレントゲン等の検査を行ない、その合間に警察が事情を聞きにきた。
一応覚えていることを説明しておく。
「事故を起こした運転手の人は？」
「亡くなったよ。心筋梗塞でね。事故の原因もそれ」
「そうですか……」
「ああ、これもよろしく」
警察官から渡されたのは、加害者に厳罰を求めるかどうかの書面。
死者に鞭打つのもどうかと思い、罰は求めない、と回答しておいた。
試みにもうひとりの被害者について尋ねてみたが、やはり教えてはもらえなかった。
「あ、運転手の人の会社に僕の情報って……」
「警察からは伝えてないよ。そういうのは随分問題になったからね」
「ここの治療費を払ってくれることになってるらしいんですが……」
「いまはお互い会わずにそういうことができるようになってるから、安心しなさい」
その言葉に、陽一は少し感心した。
所持品で破損しているものがあれば補償を受けられるかもしれないので申請するよう言われたが、奇跡的に所持品は無傷、財布の中身もまったく問題なかった。

事故についてはその後も細々と手続きがあったが、特筆すべきことはなかったので省略する。

検査がすべて終わる頃には日も暮れていた。

このまま帰ってもいいし、もう1泊してもいいと言われたので、陽一は甘えることにした。

ただ、病院側の要望で、個室から大部屋へ移ることになった。

陽一を大部屋へと案内すべく先導する看護師に続いて病院の廊下を歩く。

（最近の看護師さんてのは、ナース服とか着ないのな。ナースキャップもかぶってないし）

陽一の前を歩く看護師は、半袖のウェアに九分丈ほどのパンツスタイルで、上下とも白であった。

これも立派なナース服なのだが、陽一のイメージしているナース服というのは、上はともかく下は少しタイトな膝丈程度のスカートというものだった。

（まぁでも、これはこれで……）

陽一を案内する看護師は、陽一と同じくらいの身長の、栗色の髪をショートカットにした女性だった。

顔の大半がマスクで隠れているが、目だけを見るに、なかなか艶のある綺麗な人だった。

ただ、目が綺麗でもマスクを外すと微妙な顔だということは多いので、この看護師も案外そうなのかもしれないが、かといってマスクの下を見る機会もおそらくないだろうから、陽一は彼女を綺麗な人と思うことにした。

サイズが合っていないのか、そもそもそういうデザインなのかはわからないが、看護師の少し大きな尻のラインがくっきりと出ており、彼女が歩くたびにわずかながら揺れるその尻に、陽一の視線はしばしば誘導されていた。

（……てか歩き方エロくね？）

具体的にどうとは言い難いが、腰のあたりの動きがなんとなく艶めかしいような気がしないでもない。

「藤堂さんごめんなさいねぇ、大部屋に移ってもらっ

て」
軽く振り向きながら、看護師が声をかけてきた。
「え、あ、はい？」
看護師の尻に卑猥な視線を送っていた自覚のある陽一は、声が上ずってしまった。
「こっちの都合でご迷惑かけちゃって……」
個室だと余分に料金が発生するのだが、そこは事故を起こした運送会社が持ってくれることになっていた。
本来なら個室のまま、ということなのだが、緊急手術明けの経過観察で、ＩＣＵに入るまでもないができれば個室で様子を見たいという患者が現われ、替わってほしいという打診が昼頃にあったのだった。
あとはどうせ明日まで寝るだけと思っていた陽一は、特に嫌がることもなく個室を譲っていたのだった。
「いや、べつにいいですよ」
「ふふ。そう言っていただけるとありがたいですわ」
そう言いながら、看護師は歩みを止めた。
「おっと……」
そのせいでうしろを歩いていた陽一は、看護師に軽くぶつかるかたちとなった。
そしてそのとき、看護師のうなじのあたりから、ツンと体臭が漂ってきた。
その匂いに反応し、陽一の鼻がスンと軽く鳴った。
「ごめんなさい、臭うでしょう？」
看護師は眉根を下げて陽一のほうを見たあと、特に乱れてもいない襟を正した。
「夜勤明けでバタバタして帰れなくて、顔も洗えてないんですよ」
そう言いながらも彼女は特に恥じる様子もなく、むしろ誘うような雰囲気を醸し出しているように感じられるのだが、それは気のせいであろうか。
「はは……。いや、まぁ、だったら俺もですよ。昨日仕事明けでそのままだから」
と、陽一は病院で借りているパジャマの襟を軽く引っぱり、自分の胸元をクンクンと嗅ぐような仕草を見せた。

「あら、私、男の人の汗の匂いは好きですよ？」
陽一を見る看護師の目が、妖しくほほ笑んだように見えた。
「お、俺だって、女の人の汗の匂いは嫌いじゃないです」
陽一は看護師の表情や言葉、なにより漂う体臭を受け、息子がどんどん硬くなっていくのを感じていた。
ほほ笑んだまま陽一を見ていた看護師の視線が、ふと下に移る。
陽一がいま着ているのは病院から借りているパジャマである。
薄いコットン生地のゆったりとしたパジャマのせいで、屹立（きつりつ）した陰茎が股間にくっきりと浮き上がっていた。
「あら、たいへん」
そう呟いたあと、看護師は視線を前後に移した。
いま、廊下には看護師と陽一のふたりしかいない。
それを確認した看護師は、すぐ近くにあったトイレの『開』ボタンを押した。
すると、トイレのドアが自動でスライドする。
「こっち」
看護師は陽一の手を取ると、トイレの中に引きずり込み、即座に『閉』ボタンを押した。
自動ドアが静かな機械音を上げながら、すっと閉まる。
内側から『閉』ボタンを押すことで、この扉は自動的に施錠されるようだ。
そこは入院病棟のトイレだけあって、車椅子の患者や介護人とともに入る患者のために、かなり広かった。
「あの、ちょっと」
トイレに引き込まれた陽一は、訳もわからぬまま看護師に誘導され、壁に押しつけられた。
そしてそのまま看護師は陽一にピッタリと身体を寄せた。
汗の匂いが鼻腔をつき、密着した胸の感触が服越しに伝わってくる。

「ここ、このままじゃたいへんでしょう？」
そう言いながら、看護師は陽一の陰茎をパジャマ越しにさわさわと手で刺激した。
「おぅ……」
思わず声が漏れる。
看護師は陰茎を触るのを一旦やめ、その手を陽一のウェストにかけると、そのままパジャマのズボンとトランクスを下ろした。
屹立した肉棒が、ポロンと姿を現わす。
「あら、先っぽヌルヌルですねぇ」
看護師は陽一に身体を密着させたまま、特に息子の姿を見るでもなく、再び触り始めた。
陽一の先端からあふれる粘液を人差し指で取ると、その粘度を確かめるように人差指と親指をこすり合わせる。
「あの、看護師さん、なにを……？」
突然の出来事に頭がついていかない陽一は、戸惑いながらも看護師の意図を確認する。
「ふふ、お嫌かしら？」
「いや、その……嫌ってわけじゃ……」
「なら細かいことはよろしくなくて？」
「で、でも……」
この間も、看護師は陽一の陰茎の裏スジを撫でるように触り続けている。
「ふふ……、藤堂さんが悪いんですよ？」
そう言ったあと、看護師は空いているほうの手でマスクを少しだけずらして鼻を出すと、陽一の首筋にほとんど鼻先をくっつけた状態で大きく息を吸った。
「はぁん……、こんないい匂いさせてるんですもの……」
「いや、それはお互いさまというか……」
「ほらぁ、それも」
「へ？」
「長いあいだシャワーも浴びてない私の体臭をいい匂いだなんて言うから」
看護師はマスクをずらしたあとの手を自分のウェス

トにかけると、器用にボタンを外してファスナーを下げた。
ナース服のズボンは一部ゴムが入っているので、ベルトは身に着けていない。
看護師は陽一にしたのと同じように、自分のズボンとパンツを同時に下ろした。
（く……、見えない……）
いまいち状況を整理できないながらも、看護師の動作からパンツを下ろしたことを察した陽一は、密着した彼女の背中越しに下を見たが、わずかに尻の一部が見えるだけであった。
それはズボンの上から想像できるとおり形のいい尻であり、一部が見えるだけでもかなり卑猥なものだったが、どうせならもっと見たいと思うのが男の性（さが）である。
「……っ⁉」
あきらめて顔を上げた陽一は、思わず息を飲んでしまった。
顔を上げた先に少し大きな鏡があった。
その鏡に、自分に抱きつく看護師のうしろ姿が映っている。
そして鏡に映った尻と太ももの間から、ぬらぬらとてかる秘部が見えた。
少し色の濃い肉襞（ひだ）が看護師の呼吸に合わせるようにヒクヒクと動いており、そこからずらされたパンツに向かって、愛液が糸を引いていた。
「私のも、触ってくださる……？」
看護師が陽一の耳元で囁（ささや）く。
いまだになぜこんなことをしているのか理解できたわけではないが、この状況に抗う必要性を感じなかった陽一は、促されるまま前から彼女の股間に手を伸ばした。
「んんっ……‼」
ふさふさとした恥毛の感触を手のひらに感じながら、陽一が中指の腹を軽く割れ目に当てると、看護師が短く喘（あえ）ぎながらビクンと震えた。

割れ目はすでにぱっくりと開いていたようで、触れた瞬間から指がねちょりと濡れ、割れ目をかき分けるまでもなく粘膜に沈んでいく。
熱くどろどろとした感触に指が包まれるの感じながら、陽一は中指をゆっくりと曲げていった。
「ああんっ……！　膣内に……」
中指は抵抗なくどんどんと沈んでいき、その指先が膣内へと飲み込まれていく様子を、陽一は鏡越しに見ていた。
ズブズブと沈んでいった中指は、やがて根本まで膣内に入ってしまった。
指を膣内に挿れられ、少し動きが止まっていた看護師の手が、再び動き出した。
撫でるように裏スジを刺激していた手が、今度はしっかりと竿を握り込み、ゴシゴシとこすり始めた。
ローションもなしに手で握り込んで肉棒をこするというのは、言ってみれば普段のオナニーとたいして変わらない行為である。
しかし、女性の柔らかく温かい手で握られ、こすられるというのは、自分でこするのとはまったく異なる感触を得られるのであった。
「ねぇ、もっとクチュクチュしてぇ」
看護師が息を荒らげながら陽一の耳元で囁く。
陽一はその言葉を受け、膣内に挿れた中指をかき回し始めた。
「あああっ……！　藤堂さん、いいっ……もっとぉ……!!」
陽一が看護師の膣内をグチュグチュかき回すと、彼女はトイレの外に声が漏れないよう気をつけながら、小さい声で喘ぎ続けた。
陽一はさらに薬指も滑り込ませ、2本の指を根本まで挿れた状態で看護師の膣内をかき回した。
「んんんんっ、いっぱいグチュグチュしてぇっ!!」
看護師は陽一の耳元で囁くような声量でありながら、それでいて激しい喘ぎ声を漏らしていた。
陽一に預けた看護師の身体が少しずつこわばると、

それに合わせて肉棒を握る手に力がこもり、ピストン運動が激しくなる。
鏡越しに見える看護師の秘部からはとめどなく愛液が溢れ、陽一が激しく手を動かしたせいか、尻や太ももの付け根のあたりまでベトベトに濡れていた。
「あっあっ、イクっ！　藤堂さんっ、イッちゃうぅっ!!」
看護師の身体がビクビクと痙攣（けいれん）し始める。
「看護師さん、俺も……」
そしてほぼ同時に陽一にも限界が訪れようとしていた。
「んっんっ、いいよっ、好きなときに、出してぇ……、んあああっ!!」
膣内に挿れた陽一の指が、わずかに締めつけられるような感触を得た。
そしてその直後、陽一も限界を迎える。
「うっ……」
ドビュッと精液が放出される。
その瞬間、陽一は肉棒の先端がなにかに包まれるのを感じた。
だが、その後何度も陰茎が脈動し、そのたびに快楽によって脳髄が刺激され、その様子を確認する余裕はなかった。
「ん……あはぁ……」
射精が終わったあと、陽一が指を抜くと、看護師は嬉しそうに、しかし少しだけ名残惜しげに短く喘いだ。
射精が終わり、ようやく余裕ができた陽一が自分の股間に目をやると、いつの間に用意したのか、看護師がトイレットペーパーの束で亀頭を包み、そこで精液を受けていたのだった。
「ふふ、これだと、汚れなくていいでしょ？」
看護師はトイレットペーパーの束を器用に使って先端についた精液を拭き取ると、そのまま便器にそれを落とした。
（この人……、なんか手慣れてない!?）
陽一が感心する中、看護師はさらにトイレットペー

パーをカラカラと取り、自分の股間を拭き始めた。
（あれ、もしかして立ち位置まで計算ずく？）
そう、看護師は行為に及んだ場所から一歩も動かず、陽一を拭いたトイレットペーパーを便器に捨て、さらに追加のトイレットペーパーを手に取ったのである。
陽一は最初、訳もわからず行為に及んだが、どうやらトイレに引きずり込まれたあと、うまくこの場所に誘導されたようだった。
看護師は股間を拭いたあと、ずらしたパンツからベリベリとパンティライナーを剥がし、さっと丸めてサニタリーボックスに捨てると、ポケットから新しいものを取り出し、パンツに貼りつけた。
（いやいや、用意周到だな、おい）
テキパキという表現がしっくりとくるほど手際よく後処理を終えた看護師は、気がつけばパンツとズボンを上げており、つい先ほどまで男と卑猥な行為に及んでいたとは思えないほど普通の姿に戻っていた。
半ば感心し、半ば呆れたようにその様子を見ていた陽一と看護師の目が合い、看護師は軽くほほ笑んだ。
「ふふ。私が上げましょうか？」
看護師の指が陽一の股間を指す。
射精し、だらんと萎れた中途半端に大きいままの陰茎が、丸出しのままだった。
「ああ、いえ、大丈夫です」
陽一はあわててパンツとズボンを上げた。
「すっきりしました？」
「あ、はい。ありがとうございます」
「ふふ、かわいい」
そう言いながら看護師は陽一に歩み寄り、身体が触れ合う程度の位置からゆっくりと顔を近づけてきた。
そしてさっとマスクをずらすと、看護師は唇を重ねてきた。
柔らかく、温かい感触が陽一の唇に伝わってきた。
数秒で看護師は離れ、すぐにマスクを戻すと、そのまま陽一の脇をすり抜けてトイレの入り口まで歩き、流れるような動作で『開』ボタンを押した。

「藤堂さん、いまなら大丈夫ですよ」
ドアが開いたあと、廊下の様子を確認した看護師が、陽一に声をかけた。
「あ、はい」
陽一はあわてて返事をし、看護師のあとに続いてトイレを出た。
(結局顔はちゃんと見えなかったな)
キスの瞬間、彼女はマスクをずらして顔を露わにしたが、距離が近すぎたこともあって、しっかりとその顔を確認することはできなかった。
しかし、それでよかったのではないかと陽一は思った。
陽一はあいかわらず前を歩く看護師の尻を見ていた。
周りに人はおらず、先ほどあのような行為に及んだ以上、尻を見るくらいはどうってことないだろうとの思いから、遠慮なく視線をぶつけていた。
ナースウェアのパンツ越しに見える尻と、トイレの鏡越しに見た生尻とを脳内で重ね合わせる。
陽一は股間に血が集まるのを感じていたが、陰茎が再び張りを戻すにはまだ少し時間が必要であった。

○●○●

「それでは藤堂さん、ごゆっくり」
陽一を大部屋に案内した看護師は、ひと言そう言い残すと病室を出ていった。
少しばかり名残惜しい気もするが、これ以上は求めないほうがいいだろう。
この先もしばらく入院するというのであればともかく、陽一は明日には退院するのである。
しかもあの看護師は、夜勤明けからこの時間まで働いている様子だった。
さすがにもう帰る時間であろうし、夜勤明けで夕方まで働いて、翌日出勤ということも考えづらい。
おそらくこの先彼女と会うことはあるまい。
一旦ベッドに入ったあと、ひと眠りしようと思った

が、あの白い空間でのことを思い出した陽一は、一応確認、検証できるところはしておこうと思い直し、入院病棟のデイルームへ足を向けた。

ここは自動販売機や電子レンジと流しがあるだけの小さなキッチン、大型のテレビと新聞各紙が用意されている公共のスペースである。

もう日も暮れた時間帯なので、人の姿はほとんどない。

誰に迷惑がかかることもなさそうなので、置いてあった新聞をすべて手に取り、テーブルのひとつに陣取った。

それらの新聞にざっと目を通していき、陽一は地方紙の死亡欄に目当ての名前を見つけた。

東堂洋一

告別式は明日の午後となっていた。

次に英字新聞を見てみる。

（……読めねぇや）

どうやら【言語理解】スキルも発動しないらしい。

病室に戻り、所持品を確認する。

といっても、あの日着ていた服と、安物のショルダーバッグに入ったスマホ、財布、タオルくらいのものだが。

飲みかけのペットボトルのお茶もあったが、衛生面の関係で廃棄されたらしく、ひと言メモが添えてあった。

たいしたケガがなかったおかげか、服も切られたりせず、綺麗に洗われていた。

ふと見ると先ほどは気付かなかったが、フルーツの盛り籠が置かれていた。

どうやら事故を起こした運転手の人が所属していた運送会社からの見舞品らしい。

会社の人が直接ここに持ってきたのではなく、受付で預かったうえで病院のスタッフがここに持ってきてくれたようだ。

陽一には積極的に果物を食べる習慣がないので、同室の人たちにおすそ分けした。
「……ん？」
果物を全部取ると、盛り籠の底に封筒があった。
なにも書かれていなかったが、中には現金10万円が入っていた。
特に書類らしいものやメモのようなものもない。
こういったものを受け取ると、あとあと示談等で不利になるという話を聞いたことがあったが、無記名の封筒に入っていたものであり、受け取ったかどうかの証拠もないから、もらっても問題ないだろう。
そう判断した陽一は、その10万円をありがたくいただくことにした。
一応目についたスマートフォンを手に取り、異空間に収納すべくいろいろ念じてみたが、やはりというべきか、特に反応はなかった。
（やっぱ、あの空間での出来事は夢だったのかなぁ……）

1　見舞金の行方

「俺って駄目な男だよなぁ……」

カードの支払いが滞る可能性がある。

早ければ再来月には。

そんな中、10万円という予定外の収入。

これを支払いに回せば、再来月もなんとか乗りきれるだろう。

そして、来月あたりから徐々に仕事は増え始めるので、しっかりと節約すればその先しばらくは安泰になるかもしれない。

そう、この10万円は陽一の命をつなぐといっても過言ではない、非常に重要なものだった。

にもかかわらず、陽一はその夜、病院を抜け出していた。

検査が終わったいま、外出を禁止されているわけではないので、抜け出す、という表現は適切ではないかもしれない。

が、目の前にある建物がなんであるかを考えると、なんとなく後ろめたい気持ちになってしまうのだった。

風俗店。

そう、ここは男が金を払って女性といい思いをする場所だ。

検査が終わった直後まではおとなしく寝て翌朝帰るつもりだったのだが、あの看護師とのプレイがまずかった。

1発抜いてスッキリしたと思っていたのだが、ただの手コキだけだったことと、訳もわからず抜かれてしまったことがよくなかったのか、ベッドで寝ようとしてもムラムラして寝つけなくなってしまったのだった。

そして、気がつけば現金を片手にここに立っていたというわけである。

陽一は、繁忙期で収入が多いときに、よくこの店を利用していた。

60分1万円。
本番なしの健全な風俗店である。
ほかと比べて少し安いのは、この店がゴム着用必須の店だからだ。
正直陽一としては風俗での生接触など正気の沙汰とは思えないし、本番ありの店などもお縄になる可能性がゼロではないので怖くて利用できない。
風俗嬢たちはしっかり検査をしているらしいが、たとえば直前に寝た客がへんな病気を持っていた場合、感染される恐れはあるのだ。
検査から自分と寝るまで一切客を取っていないというのであればいいのだが、確認も実現も困難であろう。
安いうえに安全で、充分満足させてもらえるところなので、陽一は結構な頻度で利用していた。
（相手もプロだし、ゴムありでも充分楽しませてくれるからここでいいんだよ、うん）
もう少し短い時間での利用も可能だし、そのぶん安くもなる。
陽一は早漏の一発屋なので、実質15分もあれば充分なのだが、事が終わったあとにゆっくりしたいので、いつも60分コースを選んでいる。
正月が明けて間もないこの日は『姫初め特別サービス』ということで、３０００円引きとなっていた。
どうやら1月中旬くらいまではこの企画を引っぱるらしい。
７０００円であれば出費のうちには入るまい、と自分に言い訳をする。
そうやって小出しに使っていけばいずれは致命的な出費になりかねないのだが、いまは考えないでおこう。
大事故から生還したお祝いも兼ねて、今日は奮発することにした。
予約をしていなかったのだが、以前何度かお世話になってる嬢が空いてたので、指名した。
店内にはうっすらと雅楽のＢＧＭが流れており、随所に門松や鶴亀などの装飾が施されている。
（これ、部屋の中でも流れてたら萎えるよなぁ……）

そう思いつつ部屋に入ると、ＢＧＭはまったく聞こえなくなり、陽一はホッとした。
部屋の中では赤い振袖姿の女性が三つ指をついて陽一を迎えてくれた。
「あけましておめでとうございます」
赤を基調とした派手な柄の、いかにもコスプレ衣装という安そうな着物を着た嬢が、少し慣れない様子で正座したまま頭を下げている。
振袖は肩を出すように大きくはだけており、振袖にしては短すぎる裾から、ムチムチとした太ももが見えた。
「あ、うん、おめでとう」
嬢はゆっくり身体を起こし、陽一に向かってほほ笑んだ。
明るい色の長い髪にはかんざしが挿されており、頭を上げた際にその飾りがシャランと揺れる。
少し大きく開いた着物の胸元から見える谷間に、陽一は息子が反応するのを感じた。
「あら、お客さんおひさしぶりです……よね？」
「うん。半年ぶりくらいかな？」
「あはは、よかった。勘違いじゃなくて」
商売とはいえ、こうやって覚えててくれると嬉しいものだ。
この嬢の名はリナという。
身長１６０センチほどで、少しふくよかな体型だが太っているというほどではない。
胸はＤカップ（自称だが誇張はなかろう）で、腰にくびれはないが、腹が出ているというほどでもない。
お尻は大きめ、太ももはむっちりしてる。
10人いれば４人は美人と評する程度の容姿の持ち主だ。
それなりに美人で男好きのする体型。仕事もしっかりしてくれるので、じつはかなり人気のある嬢なのだが、まさか予約なしでお相手してもらえるとは思っておらず、陽一は幸運を神に感謝する。
（いや、神ってあれか……）

そのとき思い浮かんだのは、間の抜けた和服の女性だった。
「着物、どうします？」
リナは立ち上がると、襟元に手をかけて少しずらし、誘うような目で陽一を見る。
「あー、じゃああれやっていい？」
「あれ？」
「あーれーってやつ」
「あはは。男の人ってそれ好きですよねぇ？」
「あ、もしかしてさんざんやった？」
「あー、まぁ。でもそれでお客さんが喜ぶなら全然オッケーですけど？」
「よし、じゃあやろう」
陽一は振袖の帯を解くと、端を持って軽く引っぱった。
「あ～れぇ～」
リナは嬉しそうに笑いながら、帯が引かれるのに任せてその場をくるくる回る。

長い袖の袂（たもと）と長い髪がふわりと持ち上がり、ひらひらと揺れた。
「むふふ、よいではないか、よいではないか」
新年早々陽一もノリノリである。
「あぁん、全部取れちゃったぁ」
帯がすべて外れ、着物の前がはらりとはだける。
そして胸の谷間と、股間が露わになった。
「お、ノーパン」
「うふふ、着物に下着は無粋でしょ？」
だらんと垂れ下がった着物の衿（えり）で乳房は隠れているが、股間はなにも遮るものがなく、綺麗に手入れされた恥毛が露わになっており、その陰から割れ目がちらりと見えていた。
その姿が陽一の劣情を誘う。
「どうします？　全部脱ぎますぅ？」
そう言いながら、リナは衿先を持ち、着物をひらひらとさせる。
そのたびにぷるぷるとかすかに揺れるふくよかで丸

い乳房と、薄褐色のぷっくりと勃った乳首がちらちらと見え隠れする。
（姫初め、サイコー!!）
いつもとは異なるシチュエーションに興奮しつつも、陽一はさっさと服を脱いで自らは全裸になり、はだけた着物を羽織ったままのリナの下へ歩み寄った。
「とりあえず着物は着たままで」
陽一は衿を広げるようなかたちで両腕を着物の中に滑り込ませる。
着物の前が軽く開き、両乳房が露わになった。
見るからに柔らかそうな白い乳房の先端にある、少し色の濃い乳首が見える。
数秒のあいだその景色を楽しんだあと、陽一はそのまま嬢の背中に手を回し、抱きついた。
（抱き心地が最高なんだよな、この娘）
「やん、当たってるぅ」
互いの肌と肌が触れ合い、彼女の柔らかい乳房の感触を陽一が感じるように、彼女は自分の腹に当たる硬くなった陽一の男根の感触を感じているのだろう。
「あ……くすぐったい……」
陽一の胸板に、リナの柔らかな乳房が押しつけられている。
ふたりの身体に挟まれて形を変えている乳房は、見た目のとおりとても柔らかく、なんとも言えぬ感触を陽一は感じていた。
そしてその柔らかな乳房を通して、リナの体温と早鐘に打つ鼓動が伝わってくる。
ふたりは抱き合ったまましばらく見つめ合っていた。
リナはなにも言わず、薄く笑みをたたえたまま陽一を見つめていた。
陽一はリナの妖艶でありながら、どことなく切なげな表情に情欲をかき立てられ、そのまま唇を奪った。
しばらく唇と唇が重なる柔らかな感触を楽しんだあと、陽一が探るように舌を出すと、ほとんど同じタイミングでリナも舌を出し、ふたりはお互いの舌を絡め合った。

「んむ……んちゅ……レロ……」
やはりプロだ。
キスだけで脳みそが蕩けそうになる。
ねっとりとした唾液とともに舌同士が絡み合い、やがてリナの舌が陽一の口内に侵入してきた。
リナの舌は陽一の舌の表から裏まで弄り、さらに歯の裏から上顎に至るまで、彼の口内をその巧みな舌使いで容赦なく蹂躙した。
熱く柔らかなリナの舌が口内の粘膜に触れるたび、股間を刺激されるのとはまた違った、少しもどかしい間接的な快楽が陽一を襲った。
しばらく舌を絡め合ったあと、一旦抱擁を解き、ベッドへ移動する。
「どうします？　口でします？　それとも先に全身リップ？」
「いや、すぐに素股でしてもらってもいい？」
口でしてもらうのも嫌いではないが、それでイッてしまうと素股を楽しめなくなる。
人それぞれ好みもあるだろうが、陽一はフェラチオよりも性器同士をすりつけ合う素股のほうが好きだった。
「じゃ、始めますね？」
リナは仰向けに寝転がった陽一の太ももに乗るようなかたちで座ると、モノにゴムを被せローションを塗りたくった。
そしてリナは、陽一の裏スジを撫でるように優しく刺激し始めた。
「おぅふ……」
嬢の巧みな手技に思わず声が漏れる。
リナはしばらく裏スジを撫でたあと、両手で柔らかく竿を包むように握った。
そして触れるか触れないかというほど柔らかな手つきでローションを竿になじませると、そのまま今度は亀頭をふわりと包み込む。
少しだけ手に力を入れて亀頭を刺激すると、陽一は腰を引くようにビクンと震えた。

「ふふ……」
リナはひとしきりローションをなじませると、亀頭を軽く押さえつけ、竿の根本に秘部が当たるよう座り直す。
「ん……」
ゴム1枚を隔て、リナの体温が竿に伝わってくる。
「じゃあ動きますね」
リナは竿の中ほどから根本あたりまで膣粘膜をこすりつけて刺激し、亀頭を手で優しく包むように触り続けた。
「はん……んん……」
ヌチヌチという膣粘膜のこすれる音と、クチュクチュと亀頭を手とローションで刺激する音、そして嬢の荒い気遣いとときおり漏れる喘ぎ声が室内に響く。
「気持ち、いいですか？」
この素股プレイは正直挿入よりも気持ちいいのではないかと、陽一は思っている。
単純な快感だけでいえばむしろローションを使った手コキのみ、もしくはフェラチオでも充分に得られるのだが、やはり性器同士がこすれ合っているという事実が単純な感触に加え、精神的な快楽を刺激しているように思える。
そういう意味でいえば、挿入には挿入のよさがあるのだろうが、陽一はここ十数年挿入を経験しておらず、いまとなってはその感覚も忘れてしまっていた。
こうやって性器同士をこすり合わせる、挿入に近い疑似的な体験でも充分満足できるのである。
「んっんっんっ……」
手で亀頭を刺激しつつも、リナは一生懸命腰を振って竿も刺激してくれる。
リナが腰を振るたびに着物の衿がはためき、その奥の乳房がゆさゆさと揺れた。
(こう、着物がはだける姿ってのを初めて生で見たけど……エロいなっ!!)
陽一が手を伸ばすとリナは少し前屈みになってくれた。

そのおかげで乳房に手が届き、陽一はリナの胸をもみながら、ときどき乳首をコリコリとつまんだ。
「んんっ……はぁ……おっぱい、気持ちいい……」
こうやって反応してくれると、男としても嬉しいものである。
たとえ演技だったとしても。
「はんっ……んん……あっ、あっ……」
リナの動きが激しくなるとともに、喘ぎも大きくなってきた。
実際秘部の表面をこすることで女性がどれほどの快感を得られるかは疑問の残るところではあるが、こうやって喘いでくれると男のほうとしても気分が高揚するので、サービスの一環として割りきって受け入れるのがよかろう。
「ハァっ、ハァっ……、んっんっんっ……!!」
疲労のせいか、それとも快楽のせいか、リナの息がどんどん荒くなってきた。
長い髪を振り乱しながら腰を前後に動かすリナの柔らかな乳房が、ブルンブルンと激しく揺れる。
竿を半ばまで包み込むようにねっとりと絡みつき裏スジを刺激するリナの膣粘膜は、火がついたように熱くなり、ローションを足したわけでもないのにそのぬめりが増していった。
亀頭を包む手にも力が入り、リナは亀頭の裏を親指でこすりながら、ほかの4本の指を巧みに動かし、亀頭全体からカリ首までを容赦なく刺激していった。
ドロドロに熱くなった膣粘膜と、ギュッと亀頭を包み込む両手によって肉棒全体を容赦なく攻め続けられた陽一に、やがて限界が訪れた。
「出る……!!」
「いいよ、出してぇ……」
陽一は亀頭を手に包まれ、竿を膣粘膜で覆われた状態のまま、コンドームの中に射精した。
「あはぁ……、んっ、んっ、ビュクビュク、出てるぅ……」
ドクドクと精液を放出する陰茎の脈動に合わせて、

リナはさらに前屈みになり、根本から精液を絞り出すかのように裏スジをこすって刺激した。
亀頭を包み込んでいる両手も、強めに握り込みながら絞るようにカリから先端までをヌルヌルとこすり続ける。
「おぅ……」
射精中の敏感になった陰茎を刺激された陽一の口から思わず声が漏れ、特にリナの手が亀頭をこするたびにビクン、ビクンと腰が引けた。
「んふ……かわいい……。んんっ、んふぅっ……!!」
前傾姿勢になったことで陰核をこするようなかたちになったリナが、嬌声を上げ始めた。
しかしほどなく陽一の射精が終わり、肉棒が徐々に萎れ始める。
陰核への刺激が弱まったことに少し名残惜しげな表情を浮かべたリナだったが、完全に射精が止まったことを確認すると、腰の動きを止め、ゆっくりとコンドームを外した。
「うふふ、いっぱい出たねぇ」
リナは精液の溜まったコンドームをつまみ上げ、陽一に見せつけるようにプルプルと軽く振ったあと、嬉しそうに呟いた。
制限時間まであと40分と少し。
しかしその程度では、残念ながら陽一は復活できない。
では残り時間なにをするかというと、嬢と裸で抱き合って寝るのだ。
リナはまだ着物を羽織ってはいるもののほぼ裸に近い状態で、抱き合って肌が触れ合う部分に遮るものはない。
ダイレクトに柔らかな人肌の温もりを感じながら寝る、というのは、陽一にとって至福のときだった。
「時間になったら起こしてあげますね」
陽一はリナの肢体に腕や脚を絡め、柔らかな胸に顔を埋めて眠りについた。

2　謝罪と賠償

いい匂いがする。
美味そうな匂い。
焼き肉かなぁ。
耳をすませばジュウジュウと肉の焼ける音も聞こえる。
あと、なんか熱いな。
鉄板の熱かな？

「……いや、おかしいだろ!!」
風俗店でリナに1発抜いてもらったあと、陽一はそのまま抱きついて眠ったはずだ。
まさか余った時間に焼き肉をサービスしてくれる、などという風俗店など存在すまい。
あわてて起き上がると、鉄板の上で土下座する女性の姿が陽一の目に飛び込んできた。

「ちょ、なにやってんの!?」
土下座しているため顔は見えないが、和服姿からして先日の管理者であろうことはわかった。
「下界でもっとも誠意ある謝罪方法と聞いております。たび重なる不手際、誠に申し訳ありませんでした……」
「いやそれ違うから！　特殊なフィクションの過剰な演出だから!!　実際やる人なんていませんから！！！」
「たとえ過剰と云われましょうが、私の謝意を伝うるにこれ以上の方法はないと思いましたゆえ……」
「いや、なんかしゃべり方までおかしくなってきてんじゃん！　もうやめて!!」
「ではお許しいただけますでしょうか？」
「許す！　許します!!　だからもうやめて!!」
「あーよかった！」
「おおう!?」
先ほどまであった肉の焼ける匂い、音、鉄板から放たれる熱、焦げていく着物、ただれる皮膚……。

そういったものがきれいサッパリなくなり、焦げひとつない着物に身を包んだ管理者が笑顔で座っていた。
「いやぁ、私の誠意が伝わったようで、よかったです！」
「うーん……」
謝罪というより脅しと言うべきでは？　と思わないでもないが、特に文句を言わない陽一だった。
「それにしても、復活早々お盛んなことで……」
管理者がニヤニヤといやらしい笑顔を陽一に向けてくる。
「う、うるさいなぁ……ってか見てたの？」
「まぁ、そのー、不可抗力というやつですねぇ」
ニヤニヤと笑みを浮かべていた管理者だったが、ふと真顔になった。
「あらためまして、このたびは私の不手際でご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」
そう言うと管理者は三つ指をつき、深く頭を下げた。
「ああ、いえ……」

こうやって真面目に謝られると、さすがに恐縮してしまう陽一だった。
管理者の説明によると、陽一の身体を完全に修復し、スキルを付与した時点で仕事は終わったと勘違いしてしまったとのこと。
「そういえばどのへんに転移させたんだったかしら？と思い出そうにも思い出せず、藤の堂さんの居場所を確認したら、なんと元の世界にいらっしゃるじゃあーりませんか‼　しかも看護師さんとイイコトしちゃったうえに、いかがわしいお店でかわいい女の子を乗せてあんなことやこんなことまで……。そのときの私の驚きたるや……、聞いてます⁉」
「ええ、聞いてますよ。つまりアナタがドジったって話でしょ」
「あらぁ、そんなストレートに言われると照れちゃいますわ」
顔を赤らめ、両手で頬を覆い左右に身をよじる管理者。

そこは照れるのではなく、恥じるべきところだろう。
本来死ぬはずだった運命を変えてくれただけでも感謝すべきところなのだろうが、なんとなくこの管理人の態度に陽一は少し苛ついてしまった。
「とにかく、転移は失敗。こちらの世界じゃあスキルも使えないってことですね」
「あ……、う……」
陽一の言葉で、管理者の顔色が赤から青に切り替わる。
「異世界生活、楽しみだったんですけどねぇ。なんのしがらみもない新天地で、波乱万丈のアドベンチャーか、悠々自適のスローライフか、どんな生活をしようかなぁ、なんてライフプランを妄想してたんですが……。正直なところ、この先もあのワープア生活が続くのかと思うと多少憂鬱ではありますが、贅沢を言っちゃあいけませんよね、うん。あーあ、再来月の支払いどうしよ……」
陽一の口からついつい嫌味のような言葉が漏れ出てしまい、それを受けた管理者は、真っ青な顔のままプルプルと震え始める。
「本っっっ当に申し訳ありませんでしたぁ!!」
(出会ってから3度目の土下座……から、まさかの五体投地!? ……うん、勢いがあってよろしい)
全身を投げ出してうつ伏せに倒れた管理者の姿に、陽一は軽くため息をついた。
(ちょっと言いすぎたかな……)
何度も言うが、本来は死ぬはずだったところを助けてもらったことに変わりはないのだ。
なら、恨み言を言うより、やはり感謝すべきなのだろう。
「まぁ五体満足で命があっただけでもよかったとしましょう。なんか体調もいいですし」
「お待ちください藤の堂さん。このままお疲れさまでしたでは管理者の矜持に関わります。そもそも今夜こうやって現われたのは、なにも謝罪のためだけではないのですから」

管理者は五体投地の姿勢のまま首をひねって顔を上げ、さらに身体を反転させた。
ようはバンザイの姿勢で仰向けになっているだけなのだが、表情だけは至って真面目である。
「と、いいますと？」
「藤の堂さんが現在スキルを使えないのは、スキルの動力源となる魔力がその世界には存在しないからです」
「はぁ」
「つまり、魔力さえあればそちらの世界でもスキルを使用できるというわけです」
「うーん、でもこの世界には存在しないんですよね？その肝心の魔力が」
「はい。ですのでその肝心の魔力を私が融通させていただきます！」
「ほぅ……（おお！　マジか!!）」
「さらに、できる限りの加護をつけさせていただきます!!　それにより現状お持ちの各スキルがある程度強化されるはずです!!」
ありがたい……とは思う反面、これまでの経緯を考えるとつい不安になってしまう。
「あの、ありがたい提案ではあるんですが……」
「……やはりその程度ではご不満でしょうか？」
「いえいえ！　非常に魅力的なお話だと思いますよ？ただ、大丈夫ですか？」
「なにがです？」
「いや、この世界に存在しない『スキル』というものを使えることがですよ？　なんというか、パワーバランスといいますか世界設定的な問題といいますか……」
「ああ、そんなことですか！　そこはもうお気になさらず。藤の堂さんでしたらうまいことやってくれそうですし、お気に召すままご自由にお使いくださいませ」
「いや、そんなんでいいんですか!?」
「はい、そんなんでいいんです。なにかあれば介入しますから」

「か、介入ねぇ（……できるだけ自重しよう）」
「あー、あと使用可能な魔力量の目安ってありますこう、ＭＰ的な意味で」
「無制限です」
「はい？」
「無制限です。使い放題ですね」
「いや、ありがたい話ではありますが、大丈夫ですか？」
「なにがです？」
「なんといいますか、俺に魔力を融通するということで、管理人さんのご負担には……」
「私、一応世界の管理者ですので、人ひとりが使う魔力程度ではなんの負担にもなりませんよ」
「はぁ……」
「そうですね、藤の堂さんが24時間３６５日全スキルフル稼働で１００年使い続けるのに要する魔力量でも、私のひと呼吸に必要なエネルギーにすら足りません、といえば安心してくださいます？」
「お、おう……」
いま目の前でバンザイのまま仰向けに転がっているのが、ただのドジな女性ではなく、いわゆる神に類する存在であることをあらためて実感し、陽一は少しうろたえてしまった。
「では、そろそろよろしいですか？」
「あー、っと、スキルはどうやって使えばいいですか？」
「なんとなくわかるようになってますよ。疑問に思うことがあれば適宜【鑑定】が発動するようになってますから」
「そうですか。では以上で、大丈夫です」
「はい。ではこれからの人生、楽しんでくださいね」
そして目覚めると、豊満な双丘が目の前にあった。
「あれ、起きたの？」
陽一はリナの胸で目覚め、寝る前とほとんど状態は変わっていないことを確認した。

しかし、先ほどのあれが夢でないことはわかる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

名前：藤野さやか（リナ）

年齢：24

職業：風俗嬢

状態：良好

身長：１６２センチ

体重：54キログラム

Ｂ：89　Ｗ：66　Ｈ：88

現住所

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（っとぉ、さすがに住所や連絡先を見るのはまずいな）

そう、いま陽一はリナのステータスを見ていたのだ。

つまり【鑑定】が発動したことになる。

陽一は本名やプロフィールより5キログラム重い体重、微妙に異なる3サイズを見てしまったことに対し、少し申し訳なく思った。

（ってか、この娘でこのサイズなら、大半の芸能人やＡＶ女優はサバ読んでんなぁ……）

見ようと思えば生い立ちなども見られるようだ。

ただ、本名を見てしまっただけで申し訳なく思ってしまったのだ。

生い立ちなどを詳しく見てしまうと大きな罪悪感が芽生えそうなのでやめておくことにした。

仮に、彼女のバックボーンに暗いものがあったりすると、今後楽しめなくなりそうであるし。

ほかにも天井に設置されたシーリングライトを見ていると、詳細なスペックが表示される。

メーカー名、型番、生産地、消費電力、光量、参考価格等々……。

じっと見ているとどんどん詳細な情報が表示されていく。

名前：藤野さやか(リナ)
年齢：24
職業：風俗嬢
状態：良好
身長：162cm
体重：54kg
B：89　W：66　H：88
現住所

（いよしっ!!　夢じゃないぞ!!）
しかしこの【鑑定】というスキル、かなり使えそうである。
鑑定結果をさらに鑑定していくことで、たとえばシーリングライトの場合だと、生産に関わったアジア人の作業員の生い立ちですら知ることができるのだ。
それだけではない。
たとえば魔物などを鑑定することで、その弱点などもすぐに見抜けるという機能もあるらしい。
種族固有のものはもちろん、個体ごとに異なる古傷や病歴、生活習慣に基づく弱点なども。
（つっても、こっちの世界で魔物と戦うなんてことはないんだけど……いや、待てよ）
個体固有の弱点。
この部分に陽一は引っかかるものを覚えた。
そしてリナの姿をあらためて視界に収め、目を見開く。
（こ、これは……）
【鑑定】の思わぬ能力に心を躍らせていると、息子のほうがムクムクと起き上がってきた。
「えっと、まだ時間ある？」
「うん、15分あるかないかだけど。あれから25分くらい経ってますね」
（……まじで？）
30分にも満たない睡眠で復活したことなど、過去にはなかった。
これもあるいは管理者から与えられたスキルが影響しているのかもしれない。
しかし、考えるのはあと回しにする。
せっかく勃起しており、時間があるのだから。
「あのさ、まだ時間あるなら……おうっ!?」
リナが陽一のモノを優しく手でこすり始めた。
「うふふ、おっきくなってるね……。する……？」
「いい？」
「もちろん。まだ時間あるしね」
ローションを手に取ろうとしたところで、リナの動

きが止まり、陽一を振り返った。
「ねぇ、口でしましょうか？」
「口で？」
「そ。口ならゴムなしでもいいですよ？」
「ゴムなし……」
今一度リナに【鑑定】をかける。

状態：良好

つまり、現在リナはなんの病気も持っていないということになる。
であれば、生フェラチオも怖くない。
「えっと、お願い」
「ふふ、わかりました」
「あの！　こっちから攻めるのって、あり？」
「ええ、ありですよ。じゃあシックスナインにします？」
「うん、それでお願いします」

リナは仰向けに転がる陽一の上に覆いかぶさり、尻を顔の前に突き出した。
「じゃ、いっぱい気持ちよくしてくださいね。……はむ」
「おぅふ……」
ひさびさの生の粘膜の感触。
リナの柔らかな唇が陰茎の根本を包み、舌が吸いつくように絡んでくる。
（ゴム1枚でこうも違うか……）
リナの舌がゆっくりと動き、竿を舐め回したり、舌先でカリを引っかけるように刺激し始めた。
やがてリナの頭が上下に動き始める。
きゅっと絞った唇が竿を刺激し、舌が竿の背や亀頭を中心に絡みつきながら、ときおり裏スジのあたりまで回り込んで刺激してきた。
舌先が鈴口を刺激したときなどは、思わず腰が引けてしまうほどの快感を得られた。
根本まで咥え込まれたときには、亀頭が喉の粘膜に

包まれる。
リナは吸い出すように口をすぼめて肉棒を咥えていたため、頭が上下するたびにジュボジュボという音が鳴った。
想像以上の刺激に少し面食らった陽一だったが、こちらも負けていられない。
【鑑定】は対象の個体固有の弱点を見ることができる。
性感帯も弱点のひとつではなかろうかと、陽一は考えた。
そう思い、【鑑定】を通して見てみると、予想どおりいくつかの弱点が表示されたのである。
まずは人間の女性全般に共通する弱点――もとい性感帯である秘部を優しく舐め回していく。
「んぅ！　んっ……んんっ!!」
【鑑定】するまでもなくここは普通に感じるようで、陽一の舌が動くたびにリナの腰がビクンと揺れた。
さらに陽一は陰核に舌を伸ばし、優しく包皮を剥いていった。
そして露わになった陰核をチロチロと舌で刺激する。
「んあぁっ!!　あはぁ……んむぅ……レロ……じゅぷ」
一瞬口の動きが止まったリナだったが、お返しとばかりに舌の動きが激しくなる。
しかし、本番はここからである。
（えっと……襞のちょっと入って、右のこの辺……？）
陽一は【鑑定】が示すリナ固有の性感帯のうち、まずは舌が届きそうなところを刺激してみた。
「んんーっ!!　んっんっんっ……」
いままでとは明らかに違う反応だった。
ビクビクと震える腰の動きも、段違いに激しくなる。
しかしそれでもフェラチオが止まらないのは、プロ根性ゆえか。
（次は……膣内（なか）のちょっと浅いとこのお腹の裏あたりかな）
一旦さっきの弱点から舌を離した陽一は、膣口からヌプリと指を挿れた。

「んっ……」
その瞬間リナは短く喘いだが、いまさら指を挿れた程度ではどうということもないのだろう。
それ以上の反応は示さない。
陽一は挿れた指を動かし、【鑑定】が示す場所をピンポイントで攻める。
「んあああぁぁっ!!　あっあっ、らめぇっ!!」
そこは少しザラザラとした感触の場所で、ちょっと刺激しただけなのに、リナは狂ったように喘いだ。
「あっあっ……うんぐぅぅっ!!　なんでぇ？　私の、弱いとこぉ……、はぅん……」
しばらく刺激していると、徐々に反応が落ち着いてくる。
快感に慣れたのか、【鑑定】からそのポイントが消えた。
同じところをずっと刺激すればいいというものでもないらしい。
「あむぅ……じゅぶぶ……」
想像以上の刺激にフェラチオが止まっていたリナだったが、攻め続けられて慣れたのか、気を取り直して陽一のモノを咥え直した。
そして、負けじと口をすぼめてジュポジュポと音を立てながら、口内の陰茎に激しく舌を絡めた。
どうやらピンポイントの性感帯というのは、その人固有のものであると同時に、流動的なものであるらしい。
途中で消えることもあれば、反対に途中から現われることもある。
しかも、快楽が高まればそれに応じて数も増えるらしく、先ほどのポイントは消えたが、近くに別のポイントが複数現われた。
今度はそこを刺激しつつ、陰核を舐めてみた。
「んひいいぃぃっ!!　ひょこらめえええぇぇぇっ!!」
ようやく異常な快感に慣れたにもかかわらず、すぐに別のポイントを的確に攻められたリナが、腰を仰け反らせて大きく喘いだ。

露出された陰核をさらに舌で刺激しながら、陽一は膣内に入れた指を動かし、グリグリと膣道に現われたポイントを刺激する。
膣内から愛液があふれ出し、陽一は口の周りがベトベトに濡れたが、気にせず舌を動かし続けた。
テラテラに濡れた褐色の花弁はヒクヒクと震え、その奥のピンク色の膣口が呼吸をしているかのようにゆっくりと蠢(うごめ)き、内部に突っ込まれた陽一の指を軽く締めつけた。
「あああああああああああ!!」
もうフェラチオどころではないらしく、身体を仰け反らせたまま、壊れた機械のように腰を震わせ、嬌声を上げ続けていた。
一応口半ばに肉棒を咥え、舌の上には乗せているが、口を閉じることも舌を動かすこともできないようである。
そうこうしているうちに、制限時間が来た。
「おつかれさん。気持ちよかったよ」
陽一は膣から指を抜き、肘をついて上体を少しだけ起こした。
「は……え……? もう、おわり……?」
「うん。時間だからね」
「ううー……」
リナは不満げにうめきつつよたよたと立ち上がると、陽一に向き合うかたちで再び腰を落とした。
ちょうど陽一の股間の上にまたがり、イチモツを自らの秘部に当てる。
「ちょ、ストーップ!!」
陽一はあわてて起き上がり、腰を引いた。
「あ……いや、待って……」
「いやいや、待ってじゃないでしょ? だめじゃん!!」
「ええー、でもお客さんイッてないじゃん」
「いやそうだけど、充分楽しめたから、ね?」
「ううう……いじわるぅ……」
(いや、なんかキャラ変わってね? ってか、調子に

乗ってやりすぎたか？）
不満げに陽一を見つめながらうめいていたリナが、急に抱きついてきた。
温かくて柔らかい乳房や汗ばんだ柔肌が、陽一の素肌に絡みついてくる。
「お店出て右に行ったら大通りがあるのわかる？」
「はい？」
突然抱きつかれて戸惑っている陽一の耳元で、リナが囁く。
「わかる？　大通り？」
「あ、うん」
「渡ったとこに24時間の喫茶店があるから、そこで待ってて」
「へ？」
「15……ううん、10分で行くから。ね？」
「えっと……」
陽一が事態を飲み込めずに戸惑っていると、リナは抱擁を解いて陽一の肩に手を置き、じっと目を見つめた。
「いい？　約束だよ？」
「あ、うん……」
とりあえず陽一が頷くと、リナはにっこりとほほ笑み、軽く唇を重ねてきた。
「じゃ、あとで」
「えっと……、はい」
訳のわからぬまま、陽一は帰り支度を済ませ、店を出た。

○●○●

「ごめん、待った？」
陽一が喫茶店でコーヒーを飲んでいると、少し息を切らせながらリナがやってきた。
髪は少し乱れており、化粧も軽く直しただけのようだ。
タイトなニットのセーターにロングスカート、コー

トを軽く羽織っただけというシンプルなスタイルだった。
前の開いたコートの下でタイトなニットが乳房の形をはっきりとなぞっているが、その中央にピョコンと乳首の形が見えた。
（ノーブラ……？）
「もう、いい？」
「ああ、うん」
陽一は残ったコーヒーを飲み干し、立ち上がった。
ここは前払い制なので、すでに会計は終わっている。
「じゃ、行こっ!!」
リナに腕をつかまれた陽一は、カップを落とさないよう気をつけながら返却口へと戻し、店を出た。
「こっち」
リナに手を引かれながら5分ほど歩いたところで、ラブホテルに到着した。
「ここは、私が出すからね」
「いや、ちょっと……」
リナは有無を言わせずさっさと手続きを終え、陽一を引っぱって部屋に入った。
「シャワー、いいよね？」
頬を赤く染め肩で息をしているリナは、有無を言わせぬ口調で陽一にそう告げると、放り出すようにしてバッグを床に置いた。
前を閉じていないコートを勢いよくはだけ、そのまま脱ごうとしたが、袖の部分が引っかかってうまく脱げない。
「ああっ、んもうっ!!」
リナは苛立たしげに腕を振ってコートの袖から腕を抜こうとし、その途中で陽一の方に視線を向けた。
「ねぇ、なにしてんの？　あなたも早く脱いでよ」
強い口調でそう言いながら、リナはようやく脱げたコートをソファの上に投げ置いた。
「え、あ、うん」
事ここに至ってこれからなにが起こるのかわからな

い、というほど陽一も鈍感ではない。
ただ、このまま流されてもいいものかと、少し疑問に思う。
疑問に思いつつも、とりあえずシャツのボタンを外していく。
リナはコートを脱いだあと、セーターをインナーごと勢いよく脱いだ。
すると、なににも包まれていない真っ白で形のよい乳房がぷるんと現われた。
「あ、やっぱノーブラ」
すると、リナは蠱惑的な笑みを浮かべ腰に手をかけた。
「ブラだけじゃないよ……？」
言いながらリナはスカートのホックを外す。
スカートがするりと落ち、その下から一糸まとわぬ下半身が現われた。
先ほどの名残か、毛先が濡れててらてらと光っている。
そして、内ももを透明の液体がツーっと垂れるのが見えた。
その瞬間、陽一の心から戸惑いが消えた。
陽一も急いで服を脱ぎ、全裸になる。
「これ、持ってきちゃった」
リナは鞄から店で着ていた振袖を取り出した。
「着る？」
陽一が無言で頷くと、リナは振袖にするりと袖を通した。
帯までは持ってきていないようなので、前ははだけたままだ。
「ベッドで待ってて」
リナは鞄からコンドーム数個をわしづかみにして取り出すとベッドに乗り、ひとつを残して枕元のダッシュボードへ、軽く投げるようにして置いた。
「いいよ、楽にしてて」
リナは手に取ったコンドームの包みを開け、いきり立った陽一の肉棒に被せた。

「硬い……。挿れていい……？」
「うん」
リナは陽一にまたがると自分で自分の股に手をやり、クチュクチュと秘部を触る。
「んっ……んっ……。じゃ、挿れるね？」
自らの手で準備を整えたリナは、割れ目を陽一の亀頭に当てたあと、ゆっくり腰を沈めた。
「んんんんっ……!!」
リナの秘肉が陽一の肉棒を柔らかく包み込んでいく。
2回目だというのに、快感の度合いがほとんど変わらない。
「んはぁ……挿入(はい)ったぁ……。これが欲しかったのぉ」
陽一の肉棒が膣内に根本までしっかりと挿入されたあと、リナはゆっくりと腰を動かし始めた。
「んぅ……んんっ……あっ……あっ……どう？　気持ちいい……？」
ゴム越しとはいえひさびさの挿入であった。
ねっとりと濡れた熱い膣粘膜が、陰茎全体に絡みついてくる。
裏側の半分だけを刺激される素股と異なり、いまは竿全体がみっちりと粘膜に包まれていた。
そして手でしごかれるほどの強い刺激はないものの、柔らかく温かな粘膜に亀頭全体が優しく包まれる感触もまた、挿入ならではのものだった。
単純な快感の度合いだけでいえばあるいは先ほどの素股と手コキの複合サービスのほうが高いのかもしれない。
しかし、女性の膣内に自分自身が入り込んでいるという事象に対する精神的高揚感は、何物にも代えがたい快楽を陽一にもたらした。
リナが腰を上下に動かすたびに、ニュルニュルと肉棒がこすられる。
キツく締め上げられるでもなく、ただ柔らかいぬめぬめとしたものにこすられているだけなのに、陽一は脳髄が蕩けるような快感を覚えていた。
「うん、最高……」

「よかった……もっと気持ちよくしたげるね……？」
上下に動いていたリナが、今度は前後に腰を動かし始める。
角度が変わったことで、先ほどまではかすかにヌチュヌチュとだけ鳴っていた接合部から、ジュプジュプと大きな音が鳴り始めた。
柔らかく包まれるだけだった陰茎に対する刺激も、角度によっては裏スジをゴリゴリと強くこすられたり、カリに引っかかるような刺激を受けたりと、異なる種類の快感が次々と陽一に襲いかかってくる。
（ぐ……これは、やばい……!!）
リナの動きがどんどん激しくなってくる。
そして動くたびに豊満な乳房と、軽く羽織った着物が揺れる。
着物はどんどんはだけていき、やがて肩から二の腕までが露わになった。
「はぁっ……はぁっ……どう？　気持ちいい？」
「やばい……もう……」
「あんっ、膣内（なか）で、硬く……んんっ……!!　いいよ……出してぇ……」
「あぁ……!!」
リナの腰の動きはさらに激しくなり、すぐに陽一は射精した。
「あはぁん……お腹の、中で……おち×ちん、ビクンビクンしてるぅ……」
結局挿入から5分と経たずに達してしまった。
肉棒が脈打つたびドプドプとあふれ出る精液の量だが、2回目だというのに1回目と変わらない量が出ているように感じる。
「んんっ……」
リナが腰を上げ、モノが抜ける。
ゴムをつけたままの肉棒がだらんと腹のほうに倒れた。
立ち上がったリナは少しうしろに下がり、陽一の股のあいだに膝をついた。
そしてしばらくのあいだ愛おしげな視線を肉棒に向

けたあと、リナはコンドームを外した。
「2回目なのに、いっぱい出たね？」
1回目に比べると少し量が減ったように見えるが、仰向けに装着していたので、ゴムを外すときにある程度漏れており、そのぶんを考えるとほとんど同じくらいの量が出たのではないだろうか。
「うふふ……キレイにしてあげるね」
「おうっ……」
リナが、だらんと倒れた半勃ち状態のモノをチロチロと舐め始めた。
精液まみれの肉棒を綺麗にするように、竿に舌を這わせる。
根本から精液をこそぎ取るようにねぶると、カリのすぐ下をつまんで萎れた肉棒を持ち上げ、今度は竿の背の部分を舐め回した。
ひととおり竿を綺麗にしたあと、リナは肉棒をつまんだまま、亀頭を舐め始めた。
「おっほぉ……」
射精直後の敏感な亀頭を舌で刺激され、思わず陽一は声を漏らしてしまう。
「ちょ、そこは……!!」
さらに先端の鈴口にリナの舌先が入り、陽一は思わずビクンと腰を引いてしまった。
まだ鈴口に残っていた精液を、リナはチロチロと舐め取った。
そうやってリナに舐められているうちに、どんどんと息子が元気になってきた。
「え……？」
そして1分と経たないうちに、萎れていた陰茎はガチガチに硬くなり、陽一はその変化に思わず驚きの声を上げてしまった。
（……どういうことだ？）
「ふふ……あむ……」
リナは硬くなった肉棒から手を離し、口に含んだ。
「あ……ちょ……」
そして、なぜこの短時間で復活したのかという疑問

について考える間もなく、リナの攻めが激しくなる。
「はむ……じゅぷ……レロレロ……じゅぷぅ……」
リナは硬くなった陽一のモノを口に含み、舌を絡めたり口をすぼめて吸引したりして容赦なく刺激してきた。
上目遣いに陽一を見る目に、ちょっといたずらっぽい笑みが浮かんでいる。
ゴム越しの膣と違い、口腔とはいえ生で刺激される感触は、また格別だった。
「ちょ……だめだって……出る……」
濃厚なフェラが始まって3分程度で限界が訪れる。
「んんっ!! んっ……んっ……」
陽一はそのままリナの口の中に射精してしまった。
「おほぉっ……ちょ……やば……」
ビクビクと脈打ち、射精をしているあいだも、リナは舌で陽一のモノを刺激し続けた。
「んっ……」
「おぅ……」
射精が一段落ついたあと、リナは口をすぼめながら陽一のモノを口から抜いた。
そして、口を開け、手で精液を受け止めた。
受け止めきれない精液が手から垂れてベッドに落ちる。
「さっき、口でイカせれなかったから……。でも、3回目なのに、まだまだ出たね」
まったくだ。
自分でも驚きだ。
そしてさらに驚くべきことに、いまのリナの行動で、陽一の息子はまた元気を取り戻したのだ。
「ふふ、やっぱお店から持ってきて正解だったね。はい」
一応ホテルにも備えつけのコンドームがひとつはあるのだが、リナはそれだけでは足りないと踏んでいたのだろう。
リナからコンドームを受け取ると、陽一は自分で装着し、そのあとリナを押し倒した。

「いいよ、きて」
仰向けに倒れたリナの脚を広げ、前から挿入する。
ズブズブと肉襞をかき分けて侵入する肉棒へ伝わる快感は、先ほどとほぼ変わらぬままだった。
一気に根本まで突っ込んだ陽一は、そのまま激しく腰を振った。
「あっあっあっあっ!! もっとぉ……もっと……突いてぇっ!!」
腰を引いて亀頭が出るか出ないかというところまで肉棒を出す。
愛液でどろどろになった肉棒が、再びリナの膣内に沈んでいく。
接合部からは愛液があふれ、垂れた粘液のせいでリナは尻までベトベトに濡れていた。
そうやって大きなストロークのまま、陽一は腰を速く動かしていた。
肉棒が膣口を出入りするたびに、ズッチュズッチュと大きな音が鳴る。
「んっんっんっんっ!! お客さんの、硬いのがぁ、膣内(なか)で、こすれてっ……、あっ、やっ、腰、勝手に、動い……ちゃうぅっ……!!」
肉棒が膣口から出るのに合わせてリナのほうもわずかに腰が引け、半ばまで抜かれた肉棒が再び入り込んでくると、リナはそれを迎え入れるように腰を前に押し上げた。
仰向けの状態なのでそうやって腰を振っても数センチ程度しか動かないのだが、そのわずかな動きがふたりの快楽を加速させる。
そしてふたりの腰が動くたびに、リナの柔らかな胸がゆさゆさと揺れた。
陽一は挿入して以降、休むことなく全力で腰を動かし続けた。
息子のほうもだが、そういえば身体の疲労も少ないような気がする。
いつもであればこれだけ激しく動いていると、1分と経たずに息切れしていたはずだが、いまはいくらで

も動いていられそうだ。
「いいっ!!　はぁっ……ダメダメ……んぅうっ……イックウウゥ……!!」
リナの膣がキュッと締まり、体全体が激しく痙攣する。
それと同時に、陽一は4度目の射精をした。
ビュクビュクと脈打つモノは、あいかわらず大量の精液を放出しているようだった。
「……今日、すごいね」
「うん……、自分でもちょっとびっくり」
着物をはだけたあられもない姿で、少しぐったりとした様子のリナに、再び性欲が湧き上がってくる。
「まだ、できるの……？」
不安と期待が入り混じったような表情でリナが見てくる。
「俺は、まだいけそうだけど？」
「んふ、じゃあもっとしてぇ……」
陽一は一旦肉棒を抜くと、新しいコンドームを開けて装着し、そのままゆっくりと挿入した。
「んんんっ……!!」
リナの表情が快感に歪む。
5回目だというのに、リナの膣から伝わる感触が鈍ることがない。
しかし、店で1発、ホテルで3発の都合4発も出すと――、
（あ、いや、病院の看護師さんのも含めると5発か）
――都合5発も出すと、快感は変わらぬまでも多少頭のほうは冷静になる。
そこで陽一はあらためて【鑑定】を発動した。
すると、指では届かない膣内の奥のほうに、性感帯のポイントがあるようだった。
陽一は腰の位置を調整し、亀頭の先端でポイントをえぐるように突き上げた。
「んひぃっ!!　らめぇっ、そこ、ついちゃらめぇっ!!」

少し疲れ気味でぐったりしていたリナの身体がビクンと跳ね上がる。
そして、陽一がポイントを突くたびに、狂ったようによがり始めた。
「んんーしゅごいぃっ!!　あはっ、んっんっ……イクっ、イクっ、イッちゃううっ!!」
リナは身体を仰け反らせ、ビクビクと細かく痙攣を始めた。
それと同時に膣がギュウっと締まる。
陽一は新たに現われたポイントをさらに突き始めた。
「待って、待ってぇ!!　イッてるのぉ、いまイッてるのおおぉぉっ!!」
リナは涙とよだれを垂れ流しながら、狂ったようによがり続けた。
その間も陽一は肉棒をキュウキュウと締めつけられ、やがて彼にも限界が訪れる。
締め上げられる感覚のまま激しく動き続け、最後は膣の最奥部を突き上げながら射精した。

「えへへぇ……お腹の中、おち×ちん……ビクンビクン……」
リナが焦点の合わない目で虚空を見ながら、呟きを漏らす。
（うーん、【鑑定】やばいな）
どうやら陽一はとんでもない能力を手に入れたらしい。
結局その場はリナがそのまま気を失うように眠ったので、陽一は愛液まみれの膣を軽く拭いてやったあと、はだけた着物を整え、布団にくるんだ。
（ホテル代は出してくれるって言ってたけど……、ねぇ？）
プライベートとはいえプロにさんざん抜いてもらったのだ。
陽一はホテル代とお礼のメモを残して病室に戻った。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/